

第11分科会

岐阜県立岐阜工業高等学校



所在地
校 長
生徒数
連絡先

〒501-6083 羽島郡笠松町常磐町1700

長屋 千秋

1078名(27学級)

TEL 058-387-4141 FAX 058-387-4019

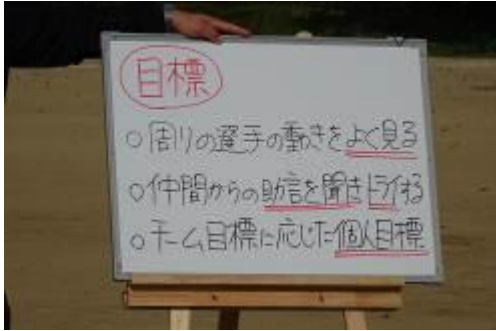
E-mail c27319@gifu-net.ed.jp

URL <http://school.gifu-net.ed.jp/>

[gifu-ths/zennichi/](http://school.gifu-net.ed.jp/gifu-ths/zennichi/)

【研究主題】

**運動やスポーツの楽しさを味わい、教え合い、
助け合い、一人一人が豊かなスポーツライフ
を継続する資質や能力を身に付ける体育授業**



1 研究の概要

(1) 研究主題

本校は工業高校ということで3年間同じ科に所属するため、年度ごとのクラス編制はない。生徒たちは学年の進行に伴い互いの個性を徐々に把握していく中で、互いが分かり合えるようになってくる。体育の授業においても、互いの個性を認め合いながら、常に前向きで明るい雰囲気の中、授業が進められている。しかし、本校の生徒はこのように互いを尊重し実直な姿勢で授業に取り組むことを得意としている一方、自分たちでコミュニケーションを深めて、課題を解決しながらさらに良い状況を作り出すという資質や能力については力不足を感じることも多々あった。そこで、3年間同じクラスという特徴を最大限に利用し、長期的展望に立ったカリキュラムを作成し、その各々の領域・種目においてコミュニケーションを豊かにするツールを利用しながら、仲間と現状を打破する姿を追求することにした。

生涯にわたって運動に親しみ、豊かなスポーツライフを継続するためには、運動やスポーツの楽しさや喜びを体感させ、将来も運動に親しもうとする態度や意欲を育てることが大切である。そのために、生徒同士がお互いに教え合い、助け合うなどしてコミュニケーションを深めながら主体的に活動する授業を展開することで、課題を解決したときの喜びや作戦が成功したときの感動を経験し、それが結果的に生涯にわたっての運動好きを生むことにつながると考え、本研究主題を設定した。

企業が高校生に求める人間像の第一は『コミュニケーション能力に優れた生徒』である。本校生徒の約3分の2が就職するという現状を踏まえ、体育の授業はコミュニケーション能力を大きく成長させる大切な場であると位置付けて取り組んだ。

(2) 研究仮説

ペアやグループで考えながら活動する時間を多く取り入れた体育授業の実践が、生徒の課題解決能力・コミュニケーション能力の育成に必要だと考えた。その方法として以下のように研究の具体を取り入れた。

① 「授業形態、グループ学習の工夫、活動の分業・専門性」(サッカー)

グループとしてどのような作戦を立てゲームを行うか。M-T-Mメソッドに沿ってグループとしてあるいは個人として成長するための練習方法を考案する。また、課題に対しては、小型のホワイトボードを利用させ、視覚的に意思統一を図る。

② 「対人競技におけるコミュニケーション能力の育成」(柔道)

柔道(武道)の対人動作を取得するなかで、互いを認め合い敬意と思いやりの心で互いに成長し合う楽しさを身に付ける。また、タブレットを利用しながら相互で動きを分析するなどして、視覚的に課題解決を図る。

(3) 研究内容

① 個人・グループが成長するための全体計画の工夫

ア 入学年次の配列の工夫

- 入学から9月にかけて「体づくり運動」「陸上競技」「柔道」を配置した。ペアや少人数のグループで活動する領域・種目を通じて、生徒同士のコミュニケーションの時間を多く確保し、互いのことをより深く理解させた。

- ・ 柔道を7月～9月に配置し柔道を嫌がる「痛い」「寒い、冷たい」を軽減しようとした。

イ その次の年次以降の配列の工夫

- ・ 2年次はマット運動を実施した後に柔道を配置した。二つの種目を連続させることで巧緻性を高めてから柔道を指導することができるように考慮した。
- ・ 3年次は体育理論を5月までに終了させ、6月以降から卒業時まで連続して実技種目を配置した。体育理論で「する」「見る」「支える」「調べる」などの運動やスポーツとの関わりを学んだ後に、卒業後を見据えた豊かなスポーツライフを体感できるような指導内容とした。

② 各種目において生徒主体で授業展開するための段階を踏まえた単元計画の作成

ア サッカー

- ・ 1年次には個人戦術・個人技術の習得に時間を割り、以降徐々にその時間を減らしながら3年次には多くの時間をグループ戦術の練習に割くようにした。

イ 柔道

- ・ ほとんどの生徒が中学までに柔道を経験していないという現状がある。そのため、1年次は受け身と固め技までを習得させ、2年次では固め技と投げ技の習得、3年次で「かかり練習」「約束練習」を経て最終的には「簡易試合」ができるように作成した。ただ、能力的に難しいクラスに対してはけがとの関係を考慮しながら行うこととした。

③ 問題解決能力・コミュニケーション能力を育成するためのツール利用方法の工夫

ア サッカー

- ・ 「ボールを持たないときの動き」「スペースを作りそれを他の生徒が使う」という学習指導要領の目標を達成させるためには、その場面を意識できる練習内容を立案させ、生徒同士で意見を交換することが重要と考えた。そのためには視覚的にとらえることが大切だと考え、作戦盤を各グループに与えた。これにより練習内容やゲームの戦い方、ゲームの反省を視覚によって確認でき理解がしやすくなった。

イ 柔道

- ・ 柔道経験のない生徒が様々な動き（技）を習得するには言葉での指導、助言だけでは限界があると感じた。そこで自分の姿をリアルタイムで確認できるツールとしてタブレットを使用した。指導者からの助言や生徒からの意見を自分の画像を見ることで比較検討ができ理解がしやすくなると思った。また、大型スクリーンも準備しタブレットと直結させ指導者がそれぞれのグループへの指導の際に使用し、大きな画面で分かりやすく見ることができるようにした。

2 公開授業

(1) 第3学年 ゴール型「サッカー」

授業者：清本 勝政 教諭

ブラジル体操からスタートした授業は技術練習、6対3のボールキープまでを一連の流れの中で行った。その後、前回までの授業で浮き彫りとなったチームの課題をどのように解決していくのか作戦盤を使用して話し合いを行い、課題克



服のための練習内容を検討してチームごとに練習が開始された。担当教諭はそれぞれのグループを巡回し、トレーニングをフリーズして助言をしたり、シンクロコーチングによる指導を繰り返したりした。助言は短く簡単な言葉を選んだ。GKは芝生の上でサッカー部のGKによる指導が行われていた。その後、再度チームミーティングを行い、ゲームでのチームコンセプトを確認してからゲームへと移行した。サイド攻撃やショートカウンターが見られるような質の高いゲームが展開された。最後に、もう一度チームミーティングを行い、ゲームの反省と次回へ向けての話し合いが行われた。練習、試合、チームミーティングのいずれも活発な意見交換が行われ活気のある授業であった。

(2) 第2学年 武道「柔道」 授業者：柴田 祐一 教諭

礼儀を重んじる武道の授業らしく黙想，座礼から始まった。後ろ受け身，横受け身を行った後，前回り受け身へと移行した。ここで1回目のタブレットを使用し，グループ（4人）内でお互いの姿を見ながら意見交換をして，再度実技を行うことを繰り返した。続いて固め技（抑え技）を行った。ここでは単独の技と連絡技の2種類を練習した後，固めた状態からの攻防を審判もつけて行い，残りの1名がタブレットで審判も含めて撮影し，その映像を見ながら意見交換を行った。担当教諭は巡回しながら声掛けをするとともに，手本となるグループを探していた。全員を集めスクリーンに映像を映して担当教諭が説明をしてより理解を深めさせていた。最後に膝付正対からの攻防を行い，同じくタブレットで撮影し，お互い意見交換を行った。意見交換はどの場面でも活発に行われ，活気のある授業であった。

3 研究協議

司会者：宮浦 英夫 教諭
発表者：清本 勝政 教諭
：柴田 祐一 教諭
：澤藤 忍 教諭



(1) 提案

<本校の主張・提案>

- ① 個人・グループが成長するための全体計画の工夫
- ② 各種目において生徒主体で授業展開するための段階を踏まえた単元計画の作成
- ③ 課題解決能力・コミュニケーション能力を育成するためのツール利用方法の工夫

<本校の実践>

- ① M-T-Mメソッドをベースに作戦盤を使用して練習法を考案する「サッカー」
- ② タブレットを利用し，視覚的に課題解決を図る「柔道」

2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は，授業者（清本教諭，柴田教諭，澤藤教諭）

□ サッカー授業において，眼鏡をかけている生徒に対しての安全性への配慮はどうしているのか。

A GKに関しては眼鏡を外すように指導している。フィールドプレイヤーに関しては，ヘディングをしなくてもよい，顔の近くに来たらよけなさいと指導している。

□ チーム練習のメニューを生徒たちで考えて実施していたが、どのような働きかけをしたのか。

A テーマを与えてそれに基づいて考えている。テーマの設定にあたっては、M-T-Mに基づき試合を実施して、生徒の中から〇〇のプレーがしたい、〇〇になりたい、という欲求を具現化するためのヒントを与えている。

□ 柔道の授業を始めるにあたって注意してきたこと、気を付けてきたことは何か。

A 導入段階で楽しい、面白いと思わせたいと考えた。受け身は、日常生活の中で身を守るということに役立つことを教えたり、マットの上で感覚をつかんでから畳の上で行ったりした。また、普段使わない筋肉を使用するため筋肉痛になるが、これはけがではないことなどと教えることにより、痛い、怖いといった恐怖心も薄れていった。



(3) 指導講評

指導助言： 埼玉大学教授 野瀬 清喜 先生

サッカーは、球技ゴール型の種目であり、生涯スポーツにつながるよう指導していくことが期待される。

柔道は、中学校で必修化となった。しかし、危ない・事故が多いという意見が多くみられた。そこから試行錯誤されて、安全で楽しい授業が展開されるようになってきた。たとえば、投げ技は、低い姿勢から指導する。そうすることにより、徐々に体がこなれていく。また、「まいった」という言葉や動作（2回以上畳や相手の体をたく）を教えることが安全につながる。

審判規定を早い段階で教えるとよい。審判用語は日本語で世界共通である。審判の動作とともに教えることによって興味づけにつながる。

受け身の練習を単独で行うことがある。学習指導要領の中では、受け身は対人的技能と関連して行うとなっているが、スポーツ活動や日常生活の中でも役に立つ技能として習得するには単独で行うことも有効である。ある程度受け身の技能を習得したら、準備運動の中に取り込んでいくとよい。そうすることで活動時間を確保することができる。

学生時代に柔道の経験がない指導者でも、柔道の授業ができるということを広めていきたい。投げ技に関しては、膝をついた位置から始める、ゆっくりとした動作から始める、ということから指導するとよい。

また、伝統的な考え方、行動の仕方、日本文化としての武道ということも伝えていく必要がある。

「鞘当て」…侍がすれ違うときに鞘がぶつかる、触れるという行為は失礼であり、決闘をも意味する。すれ違うときは、お互いに左側を通る。いまだにその習慣がある。

「呼吸」……人間の呼吸はひと呼吸3～4秒である。立礼はひと呼吸の3～4秒。柔道の反則はふた呼吸であった。国際化に伴い5秒とか10秒の数字で示すようになった。



4 成果と課題

(1) 成果

【サッカー】

- サッカーは、足元にあるボールを扱いながらプレーするため、周囲の視野の確保が非常に困難なスポーツで、視野の広さと技能レベルには極めて強い相関関係が存在する。個人技能を習得する上で、反復練習中に常に周囲の確認（状況判断）ができるよう意識させたことで、周囲を見ながら余裕をもってプレーすることができるようになった。
- グループ戦術に関する話し合いの機会をもたせる場合には、各グループにホワイトボードを配付し、仲間と協力して組織的に勝利を目指すような意見交換を働きかけた。結果的に、サッカー部員を中心に一つの輪になって視覚的に練習内容や作戦を考えるようになり、練習中は互いに教え合う機会が大変多く見られるようになった。
- ゴールキーパーにはフィールドプレーヤーとは別に練習を行う時間を与え、より専門的な技能の向上を目指させた。各グループから1名ずつ指名（内1名は昨年の全国選手権出場者）されたゴールキーパーに時間と課題を与えたことによって自覚が生まれ、互いに教え合うことができるようになったとともに、ゲーム後に互いのプレーについて練習内容をフィードバックさせながら話し合う場面も見られるようになった。

【柔道】

- マット運動に続いての配列により、安全面の確保の大切さを確認した状態で授業に入ることができた。安全面に対して互いにアドバイスをする姿が多く見られ、コミュニケーション能力の育成という側面からも有効な単元の配列であった。
- マット運動に続いての配列により、ボディコントロールが得意な生徒とそうでない生徒を把握した上で柔道を開講することができ、結果的に、相手の力量を考えての「取」と「受」を行うようになった。
- 柔道は、活動時間に多くの「痛み」を感じる種目である。柔道を好まない生徒があげる理由の一つに、この「痛み」がある。学校体育の領域の中で、頻繁に「痛い」という感覚を味わうのは武道だけである。「取」と「受」が激しく入れ替わる関係の中で、痛みを共有しながら相手のこと（立場）を想い、安全を確保して活動できるようになった。
- 初めて柔道を行う生徒が多く、一年次は固め技を中心に行った。固め技を行うことで互いの鼓動や息遣い、体の温かみ、重さを感じ合わせる体験ができ、相手を思いやる気持ちを育むことができた。
- タブレットを使用したことは様々な効果をもたらした。第一に、自分自身の動きを客観視できるため、ボディコントロールが苦手な生徒が自分自身の様相を確認することができた。第二に、撮影者は被写体の生徒の体のどの部分をフォーカスすべきかを考えて撮影するため、後の練習で自分自身のその部分を意識した体の使い方ができるようになった。そして最後に、互いの映像を視聴することで意見交換の場面が多く見られ、コミュニケーション能力の育成に大いに役立った。
- 柔道（武道）で重んじる礼儀作法や相手を尊敬する考え方については、入学年次の体育理論の単元にある「スポーツの歴史的発展と変容」の中で取り扱う「嘉納治五郎」の部分で触れていたため、スムーズに学習に入ることができた。

【全体】

- 互いをよく理解し、コミュニケーション能力を身に付けさせるための体育授業の展開はいかにあるべきかを模索してきたが、サッカーでのホワイトボードや柔道でのタブレットというツールの使用により、教え合ったり助け合ったりする場面が格段に増加し、課題解決や成功の体験を多く得ることができた。

(2) 課題

【サッカー】

- ゲームを通してグループから出された課題解決のための練習内容が果たして現状にマッチしているかどうか、あるいはどのタイミングで飛躍的に練習効果が上がるアドバイスを示してやるべきかが難しい問題である。
- 審判法を確実に理解させ、組合せや試合時間を決定するなどのゲーム運営も自分たちでできるようにさせたい。それがスポーツを「支える」という関わりからみても望ましい。また審判や対戦相手をリスペクトする心やフェアプレーの精神も成就させ、さらに人間性を磨く必要がある。

【柔道】

- あえて夏の時期に柔道を開講したのだが、柔道を「嫌い」「やりたくない」とする理由として、「痛い」「暑い」「汗臭い」「人と接触したくない」等、これまでとは異なる理由が出てきた。忍耐力のない生徒が増えていることは間違いないが、多様化した生徒への指導の困難さを感じている。
- 「動作を撮影し、映像を見ながら分析する」ことを柔道の学習ととらえて授業を進めていく中で、評価をどうすべきなのかが検討中である。
- 技術、体力差が出てきたときのグルーピングが課題として出てきた。「思いっきり」「力一杯」柔道をやりたいという欲求をもつ生徒に対して、安全面を最優先に考えて授業を展開したい指導者の思いがあり、このバランスにも難しさを感じている。

【全体】

- 豊かなスポーツライフを継続する資質や能力は、高校時代の体育・運動部活動に宿るところが大きい。特に体育の授業において、試合だけを重視した活動や一部の生徒だけしか満足できない内容では、より多くの生徒が本当の意味で生涯にわたって運動に親しむことはできない。活動のプロセスの中でコミュニケーション活動を重視し、コミュニケーションが優れた生徒を全ての領域を通じて育成し、社会に出たときに様々な形で主体的にスポーツに関わることができる子供たちを育てたい。「する」だけのスポーツではなく、ルールや審判法を理解してテレビで「見る」もよし、興味をもった選手をインターネットで「調べる」もよし、応援やボランティアとして「支える」もよし、方法は様々である。